

「鬼交」と房中術

——『夷堅志』における民間治療の用例から見る房中術の思想の影響——

孫 瑾

一 はじめに

『夷堅志』にある「鬼交」の用例の中に、男と交わる雌犬の腹中にある精液と思われるものを男に服用させるという治療方法がある。⁽¹⁾これは民間治療に投影された房中術の還精思想の素朴な形を示したものとと言える。

「鬼交」に對する古代社會の理解は房中派の思想と深く関わっている。「鬼交」は『黃帝內經』では「狂」に分類されているが、魏晉になってからは「與鬼交通」「與鬼交」「鬼交」などと呼ばれるようになった。この時期、房中家がそれ以前の房中説を引き継ぎつつ新たな要

素を加えて房中術を語っていた。また術として道教に受け入れられたこともあつて、六朝から隋唐までの房中派は飛躍的に發展していく。「鬼交」を、患者と「鬼」とが性的な關係を行った、と初めて解釋したのはまさに當時の房中文獻である。その解釋は唐の醫學全書にも取り入れられた。この背景を考慮に入れれば、房中の思想が「鬼交」の治療方法に現れるということは偶然ではないと言えよう。

本稿は「鬼交」と房中術との深い關連を検討する。また『夷堅志』の用例を對象としてその民間治療法における還精思想の影響を明らかに示したい。

二 「鬼交」について

(一) 物交と鬼交

『論衡』訂鬼篇にもこの病氣に言及した一節がある。その中ではまだ「與鬼交」でなく「物與之交」とされている。症状は「鬼の來たるを見るなり」というようであり、見た「鬼」は亡くなった家族や見知らぬ人の様子をしているという。⁽²⁾この「鬼」即ちある「もの」を妄りに見たことは「鬼交」の典型的な症状の一つである。

ほぼ同時代の醫書『傷寒雜病論』の雜病の部分（後に『金匱要略』となったテキスト）には、この類の病氣について「男子失精、女子夢交」と記されている。「夢交」とは六朝以降の醫書にある「婦人夢與鬼交通」（『諸病源候論』卷四十、以下『諸病源』と略記）、また男性の場合の「夢與鬼神交通去精」（『備急千金要方』卷十九補腎第八）のような状況に類比することができる。

『肘後一百方』は、患者と交わる相手を「鬼」で表す早期の醫學文献である。現存の版本では、「女人與邪物

交通」という病症に對する二つの治療法が詳細に述べられてから、「若男女喜夢與鬼通」という附け加への形で、「夢與鬼通」の處方が簡略的に記されている。⁽³⁾患者と交わる相手は「邪物」とされながら「鬼」ともされる。ただそれ以降の醫書においては「鬼」とされることが定着するようになった。「鬼魅」「鬼物」という少數の例も見られるが、やはり「鬼」を中心とする名稱であることに變わりはない。

『肘後一百方』は葛洪の『肘後救卒方』に新たな處方が陶弘景によって加えられた後のものである。「女人與邪物交通」の「邪物」が訂鬼篇にある「物與之交」の「物」に近いことをも踏まえて、「若男女喜夢與鬼通」の項目は後の増補であった可能性が高い。葛洪の時代には、人間と交わる相手をまだ訂鬼篇と同様に「物」で表す一方、よこしまな性質を示すために、それを「邪物」と呼ぶようになったのではないだろうか。人間と交わる「物」や「鬼」の具體的な意味は様々である。訂鬼篇の「物與之交」の説には「鬼」すなわち「物」が長い年月

を経て妖怪になったものの精(4)とされている。『夷堅志』には動物妖怪とされる用例が多数である一方、死んだ人や祭られる廟神とされる例もある。これについてはまた別稿で論ずる。

(二)「交」の意味

『論衡』及び後の醫學文献にある「鬼交」の記述によると、「交」を性的な交合と簡單には定義しがたい。訂鬼篇には「物與人交」の原理ついて以下のように述べる。

人之受氣有與物同精者、則其物與之交。及病精氣衰劣也、則來犯陵之矣。(人の受くる氣は物と精を同じくする者有れば、則ち其の物之と交はる。病みて精氣衰劣なるに及べば、則ち來たりて之を犯し凌ぐなり。)

〔論衡〕卷二十一・訂鬼篇

萬物は自然の氣を受けて生まれ、自然の氣を呼吸攝取して生命を維持していく。精氣はその中の最も純良な氣であり、生命力の源である一方生命そのものの根柢(5)でもある。訂鬼篇の「物與人交」の説はまさにこの精氣の理

論に基づいていると思われる。この引用文で述べているように、自然から受けた精氣があるものと同質であれば、そのものが人間と交わるといことは、同質であるために兩者の氣の間に連続性があつて互いに繋がることのできるからであらう。そして人間の精氣が病で弱くなった時に、ものの精氣が強くなったため、人間の氣の場に侵入してそれを押し伏せてしまうことになる。訂鬼篇のこの記述に類似する内容は、隋の成書で専ら病理や病症を論ずる『諸病源』にも見られる。

人稟五行秀氣而生、承五臟神氣而養。若陰陽調和、則臟腑強盛、風邪鬼魅不能傷之。若攝衛失節而血氣虛衰、則風邪乘其虛、鬼幹其正。然婦人與鬼交通者、臟腑虛、神守弱、故鬼氣得病之也。(人は五行の秀氣を稟けて生まれ、五臟の神氣を承けて養はる。若し陰陽調和すれば、則ち臟腑強盛にして、風邪鬼魅も之を傷つく能はず。若し攝衛に節を失ひて血氣虚衰なれば、則ち風邪其の虚なるに乘じ、鬼其の正に幹す。然るに婦人の鬼と交通する者は、腑臟虚にして、神守弱きが故に、鬼

氣得て之を病ましむるなり。〔諸病源〕卷四十・與鬼
交通候

人間は五行屬性の秀氣を受けて生まれ、五臓に應ずる五つの神氣をもって生命を養う。體の内部で、氣の陰陽のバランスがとれていれば、五臓及びそれと表裏の關係を爲す腑器が強くなるため、人間は外部の風邪や鬼魅に侵害されることがない。逆に不適當な攝養によって内部のバランスが崩れば血氣が弱くなり、人間は風邪や鬼魅に侵害されてしまう。それゆれ婦人の「鬼交」は臟腑の虛弱によって「神守」⁽⁶⁾が弱くなるため、外部の鬼の氣が内部に侵入してその病氣を致したということであると述べている。

訂鬼篇の「精氣」に對して『諸病源』では「秀氣」「五臟神氣」「血氣」が言及されている。「秀氣」は文字の通り秀でる氣であり、氣の中の最も優秀なものである。その意味では精氣の「氣の精なるもの」⁽⁷⁾と異曲同工であると思われる。五臟神氣は五臓に宿り、人の場において臓器の運行及びそれに應ずる意識、思惟、情緒(神魂意

魄志)などの精神作用を掌る。血氣は全身の脈絡を巡ると同時に、五臓とも密接な關係を持っている。『黃帝内經太素』には「五藏者、所以藏精神血氣魂魄者也」(卷六・五藏命分)⁽⁸⁾とあり、五臓は精神魂魄だけでなく、血氣をもおさめているという。また「熱氣淳盛・内連五藏、血氣竭」(卷二十六・癰疽)⁽⁹⁾ともあり、熱毒は五臓まで侵入すると血氣が盡きてしまうという。⁽¹⁰⁾ 訂鬼篇では「精氣」のみに言及するが、『諸病源』では精氣と同様な秀氣のほかに、さらに人間の氣のシステムにおいて主導的役割を果たす五臓の神氣、及びそれにかかわる血氣にも言及している。『諸病源』は自然の氣が五つの性質を持っているという點に着目し、それに應じて生命の運行に關わる主要な精氣を五臓に屬する五つの神氣に細分化したのである。

しかしながら、その病理解釋の根底にある氣の理論は訂鬼篇と變わらない。それは氣の場の内部の精氣が弱くなったため、外部の氣が侵入して内部の氣のメカニズムを破壊してしまうということである。『諸病源』によれ

ば、病因が外物である、即ち外因に基づく病氣のほぼすべてがこの理論に適用できる。それに基づく「鬼交」の病理説は、鬼氣が人間の氣の虚弱に乗じてそれを侵害して病氣を致すということになる。

この視角から考えれば、「鬼交」の「交」は原則的に鬼氣と人氣の交わりと理解すべきである。人間の場に侵入した鬼氣は人間自身の氣と交わる一方、人間の氣より強いためそれを押し附けるようにもなっている。それで獨語で誰かと對峙しているように見えるという症状は、二つの氣が體への支配を争っていると捉えられる。また患者が氣が狂つていつもと異なる振舞をする場合は、鬼氣が患者自身の氣を完全に壓殺して、體を全面的に支配するようになったと理解できる。

訂鬼篇にはまた、病人が鬼を見ることは、病氣の時の目の機能が睡眠の時と同様に、その視線の方向が外でなくて内だからである、⁽¹²⁾という説が見られる。それによれば、「鬼交」の患者が見た鬼は、その體内に侵入した鬼だと把握することもできる。

三 房中派の解釋…「陰陽不交」と「鬼交」

「鬼交」の「交」が氣の醫學論によつて鬼氣と人氣との交わりを意味するということを述べた。にもかかわらず、この病症を性的な關係に關連附けて「交」を交接とする傾向は六朝から強くなつてくる。これは後漢以降、特に五世紀頃に發生した房中派の盛行に關わつていると考えられる。當時の社會で傳わつていた房中文獻の多くは後に亡佚してしまつたが、日本の『醫心方』⁽¹³⁾には『素女經』『玄女經』『玉房祕訣』などからの斷片的な引用が残っている。中でも特に「鬼交」に觸れているのは『玉房祕訣』(以下『玉房』と略記)である。

『玉房祕訣』云。采女曰、何以有鬼交之病。彭祖曰、由於陰陽不交、情慾深重、即鬼魅假像與之交通。與之交通之道、其有勝於人。久則迷惑、諱而隱之、不肯告人。自以爲佳。故至獨死而莫之知也。(『玉房祕訣』に云ふ。采女曰く、何を以てか鬼交の病有る、と。

彭祖曰く、陰陽の交はらざるに由りて、情慾深重となれ

ば、即ち鬼魅は像を假りて之と交通す。之と交通するの道は、其れ人に勝ること有り。久しければ則ち迷惑し、諱みて之を隠し、肯へて人に告げず。自ら以て佳しと爲す。故に獨死に至りて而るに之を知ることなきなり、と。）

〔『醫心方』卷二一・治婦人鬼交方第卅）

采女と彭祖との問答によつて「鬼交の病」の病理を語っている。長い間に相手と交接していないため性欲が強まるということがその病因とされる。また鬼魅による性體験が人間によるものを超えるため、惑わされた患者はその事情を周りに告げることもせず、そのまま弱くなつて死んでしまふと述べる。

「鬼交」の根本的な病因とされる「陰陽不交」に注目されたい。「陰陽不交」で病氣が起ることにについては、例えば『抱朴子』に、

陰陽不交、則坐致壅闕之病。故幽閉怨曠、多病而不壽也。（陰陽交はらざれば、則ち坐して壅闕の病を致す。

故に幽閉怨曠、多く病みて壽せざるなり）（同・釋滯）とある。ここの「壅闕之病」とは内部の氣の塞がりによ

る病氣と理解してよい。それに近い考え方は『醫心方』にも見られる。

『醫心方』卷二十八「房内」から、「陰陽不交」の弊害を論じる三つの引用が見つかる。一つ目は右の釋滯篇の例と同じ内容であるが、黃帝と素女との問答形式を取り、冒頭に「素女經云」としている。『抱朴子』内篇・遐覽にはそれ以前の房中書として『素女經』が擧げられているが、『醫心方』の一つ目の引用と釋滯篇の例とは同じく『素女經』に由來するものであろう。そして、二つ目も黃帝と素女との問答形式の文章である。

黃帝問素女曰、今慾長不交接。爲之奈何。素女曰、不可。天地有開合、陰陽有施化。人法陰陽、隨四時。今慾不交接、神氣不宣布、陰陽閉隔、何以自補。練氣數行、去故納新、以自助也。（黃帝素女に問ひて曰く、今長く交接せざらんと慾す。之を爲すに奈何ぞ、と。素女曰く、不可なり。天地開合有り、陰陽施化有り。人は陰陽に法り、四時に隨ふ。今交接せざらんと慾せば、神氣宣布せず、陰陽閉隔し、何を以てか自ら補はん。鍊

氣を數行^{しげば}ひ、故きを去りて新きを納め、以て自を助くるなり、と。(卷二八・至理第一)

天地陰陽の氣が交わつて萬物を生み養うように、男女の陰陽の氣も交わつて自分の生命を養うべきだとしている。さもなければ自身の神氣を巡らせることができず、古い氣を出して新しい氣を取り入れることもできなくなり、結局生命の活力を維持できないと述べる。その論理は釋滯篇の「壅闕之病」の「壅闕」と異曲同工である。

三つ目は『千金方』からの引用である。

『千金方』云。男不可無女、女不可無男。若孤獨而思交接、損人壽、生百病。又鬼魅因之共交、精損一當百。(『千金方』に云ふ。男は女無かるべからず、女は無無かるべからず。若し孤獨にして交接を思へば、人壽を損ひ、百病を生ず。又た鬼魅困りて之と共に交はり、精の一を損することは百に當たる) (同右)

男女は、相手がなくて交接を慾する氣持ちが満たされないことは、壽命の減損や様々な病氣を齎してしまう。

特に鬼魅が隙に乗じてそれと交わると、精の損失が普通

の百倍となるといふ。『千金方』は『玉房』と同様に、「陰陽不交」による強い性慾を「鬼交」の病因としている。また『千金方』の宋改版『備急千金要方』には類似した見方の内容がある。

男不可無女、女不可無男。無女則意動、意動則神勞、神勞則損壽。…有強抑郁閉之、難持易失。使人漏精尿濁、以致鬼交之病。損一而當百也。(…女無ければ則ち意動き、意動けば則ち神勞れ、神勞るれば則ち壽を損ふ。…強ひて之を抑郁し閉づるは、持ち難く失ひ易きこと有り。人をして精を漏らし濁を尿せしむるは、鬼交の病を致すを以てなり。…) (『備急千金』卷二十七・房中補益第八)

實は、右の『千金方』と『備急千金』との内容はともに陶弘景の『養性延命錄』¹⁵⁾に見られる。その文章は『玉房』と同様に采女と彭祖との問答形式をしている。先行研究によれば、それは『彭祖養性經』或いは『彭祖養生經』¹⁶⁾からの引用となる。二文獻がともに彭祖に名を託した書物とされている説がある。¹⁷⁾

彭祖は馬王堆出土の房中關係のテキスト「十問」にも現れている。ただし、大形徹氏が述べているように、彭祖は魏晉以前にはまだ房中家の代表的な人物とはなっていない。葛洪の時代になってから房中術で道を得た大家とされるようになり、『神仙傳』や『抱朴子』以降の房中派の論述において頻繁に現れるようになってきた。⁽¹⁸⁾しかも「十問」に現れる彭祖は「采女」とペアになっていない。右の『玉房』や『養性延命録』にある彭祖に名を託した論説は魏晉以降のものであろう。

注意すべきは、『醫心方』にある「陰陽不交」の三つの引用において、『千金方』からの引用は明らかにほかの二例と異なることである。黃帝と素女とのペアの二例は釋滯篇の「壅闕之病」と同源であつてもに『素女經』に由来する可能性が高いが、『千金方』からの引用は、『養性延命録』や『玉房』などと同様に、「陰陽不交」の説を六朝以降の病氣「鬼交」と關連付けていることによつて、紛れもなく六朝以降の房中論説であると確認される。

また、『醫心方』卷二十八「斷鬼交」に引かれる『玉房』の斷片には、「鬼交」を「怨、曠、之、氣、爲、邪、所、凌」と説明することも見られる。「怨曠」とは釋滯篇の「幽閉怨曠」と同様に、長い間に配偶者から離れている、また付き合う相手がいない、つまり「陰陽不交」を指す。しかしながら兩文獻における「怨曠」の働きは全く異なっている。釋滯篇においては、内部の氣の塞がり病氣を齎しているのであるが、『玉房』においては、外部の邪氣の侵害を招いて「鬼交」の病氣が起こっているのである。

注意すべきは、外部の邪氣が内部の氣の弱點に乗じてそれを侵害するという考え方は、前に述べた『論衡』や『諸病源』における、氣の醫學論に基づく「交」の解釋に相應しいということである。『玉房』などは「鬼交」を解釋するのに、氣の理論を「陰陽不交」の房中説に融合させて、外部の邪氣を人間の形に化けた鬼魅とし、それと患者の氣との交わりを男女の交接としている。

以上、『玉房』などに見られる六朝以降の房中説は、「陰陽不交」の弊害論を「鬼交」と結びつけて、その病

症を患者が鬼と交合すると解釋していた。こういった解釋は房中思想の内容を豊かにした一方、『千金方』など後世の醫書及び民間における「鬼交」に對する理解に影響を與え續けた。特に民間の考え方はその影響をごく直接的に示している。例えば、宋の民間の怪異を記した『夷堅志』には「鬼交」の病症の事例が多く集められているが、その殆どは患者があるものと性の關係を結んだからと考えられている。醫書に記されている、一人で言笑するという症状は、『夷堅志』の用例では、「鬼」と密會する様子とされている。

四 「鬼交」の民間治療と房中術の思想

「鬼交」に對する民間の理解は房中文獻の解釋に影響を受けていた。その病症は假に存在する鬼、すなわち交接の相手に關わるため、治療もそのものを追い拂う、または消滅するという形を取ることが多い。一方、『千金方』に「精損一當百」と述べられるように、鬼と交わることによつて患者自身の生命力も大きな損害を被る。羸

瘦、悪い顔色、無氣力、疲勞困憊など、體の虛弱を示す症状がよく言及される。また、特に患者が男性である場合においては、生命力の損失が強調される。⁽¹⁹⁾そのため男性の「鬼交」の治療には、失つた生命力を補い還すことに言及した例が見られる。まずその一例を簡略に紹介する。

ある家に寄寓する男は、婦人に化けた雌犬と淫亂して「瘵」病になつた。この家の若者はそのことを察知して雌犬を殺した。雌犬が妊娠していたように見えるが、腹を切り裂くと腹中には膜の球のようなのがあり、中には凝結した乳色の精液だらけであると氣附いた。それを料理にして男に食べさせると婦人が來ないようになり、後に男の「瘵」病も治つたという。(『夷堅志』丁志卷二十・黃資深)⁽²⁰⁾

「瘵」は傳尸とも呼ばれる。「治婦人鬼交方」に引用された『玄感傳尸方』はその病氣を論ずる専門醫書である。「鬼交」は『玄感傳尸方』を始め唐代以降の醫書においてよく傳尸病の病症の一つとされるようになった。⁽²¹⁾雌犬

が妊娠していたとされたが、腹中には子犬や人間の胎兒ではなく膜の球があつて、それが男の精液が凝結したものであると考えられている。治療方法としてはその精液を患者に食べさせることである。

「交」の相手の所に患者の精液が見つかるという記述は次の例にもある。

男は亡婦の畫像を見て淫慾の心を起こし、夜にいつも彼女と交わる夢を見、間もなく死んでしまった。

男の家族はそのことを知つて畫像の軸を裂くと、精液が軸に満ちていることに氣附いた。(『夷堅志』甲 志卷十九・僧寺畫像)⁽²²⁾

これは男性の「夢與鬼交通」の例である。男と交わる亡婦の畫像の軸に男の精液が満ちているということは、丁志卷二十・黃資深で男と交わる雌犬の腹中に男の精液が包まれていたことと類似する。二例は共通して、精液が交わる相手に大量に取られたことを病弱また死亡の原因としている。

(一) 精液と還精の思想

男の精液を直接生命力と關係つける考え方は、房中思想と密接に關わつている。『十問』に既に「下を實たし精を閉づれば、氣、漏泄せず…慎みて守り失う勿くんば、長生して世を累ねん」⁽²³⁾とあり、射精せずに精氣を漏らさないことによつて長生の目的を達すると述べる。精液を惜しんでその排泄を抑止することは房中術の主旨の一つとしてよく語られる。『醫心方』に

夫陰陽之道、精液爲珍。即能愛之性命可保。(夫れ陰陽の道は、精液を珍と爲す。即ち能く之を愛しめば性命保つべし)(卷二八・治傷第廿)

とあり、交接において精液は最も尊いものであり、それを愛惜すれば生命を長く持ち續けることができるという。また交接の要義は、

在於多禦少女而莫數瀉精、使人身輕百病消除也。

(多く少女を御して數瀉精する莫きに在れば、人をして身を輕くし百病もて消除せしむるなり)(同・至理第二)

と述べているように、多くの少女と交合して射精の回数

を少なく控えることにあり、そうすれば體を軽くして様々な病氣を治せるとしている。その原理は放出しようとする精氣を體内に逆流させて體の機能を補益する、所謂「還精」である。

能動而不施者所謂還精。還精、補益生道乃者。(能く動きて施さざるは所謂還精なり。還精は、補益して道を生ずるの者なり。)(同右)

「精」を具體的にどこへ還すかについて、『醫心方』の収集には二通りの言い方が見られる。一つは、例えば耳目聰明や五臓の調和及び百病の治癒のため、射精しようとする時に精・精氣を體の百脈に歸らせるということである。逆に、女色に惑溺して、無理矢理交接してあくまで射精しようとする、精氣が盡きて百脈が損なわれ、百病が起こるとする。例えば以下のような記述が見られる。

臨施：精散而還歸百脈也。(施すに臨み：精を散して百脈に還歸せしむるなり)

臨動慾施時：縮腹還精氣、令入百脈中也。(動きて

施さんと慾する時に臨み：腹を縮めて精氣を還し、百脈の中に入らしむるなり。)(同・治傷第廿)

百脈皆傷、百病竝發也。(百脈皆な傷つき、百病並びに發こるなり。)(同・至理第二)

もう一つは、放出しようとする精液を生殖器から脳に還流させるということである。例えば以下のような例がある。

還精補腦之道：但從玉莖復還上入腦中也。(還精補腦の道：(精) 但だ玉莖從り復た還り上がりて腦中に入るなり)(同・還精第十八)

房中の「還精補腦」は釋滯篇⁽²⁴⁾にも見られる。原田二郎氏は、上清派早期の文獻『黃庭內景經』にある「腦神は精根、字は泥丸」に基づいて、當時において腦を精の根源とする考えがあると推測した。氏はその考え方を「還精補腦」の前提としており、「精」が六朝以降になつてから腦すなわち身體にある最も尊い神の宿る場によ來するとされるようになったことは、精・精液が當時の養生家に重視されることを示している、と述べる。⁽²⁵⁾

補腦」については嚴善昭氏の研究も参照されたい。⁽²⁶⁾

つまり、當時の房中術においては精液が百脈即ち全身および脳の機能に關連するとされている。例えば唐の白履忠（號は梁丘子）は『黃庭內景經』の「長生至慎房中急」に對して「氣亡液漏、體腦枯竭」と注し、房中の不當によって精氣が盡きて精液が漏洩すれば、體と腦とが枯渇してしまふという。

こういった考え方は民間における男性の「鬼交」に對する理解の前提となつていゝと思われる。且つ『千金方』に「鬼魅因之共交、精損一當百」というように、「鬼魅」との交接によって被る生命力の損失が、一般の男女の交接の百倍になると考えられている。また男性患者には體の虚弱のほか、恍惚、癡呆或は幻視幻聽など精神方面の異常も屢々説かれるが、それらは精液の過度の消耗による脳部の枯渇に關わると解釋できる。

(二) 雌犬と西王母

雌犬の腹中に凝結した男性の精液が見つかったという

「鬼交」と房中術

記述も興味深い。

房中のテキストはたいいてい男性の視角から「養陽（女性の陰氣を取つて男性の陽氣を養う）」の方法を述べているが、『玉房』は女性の視角からの「養陰（男性の陽氣を取つて女性の陰氣を養う）」の方法にも言及している。

非徒陽可養也。陰亦宜然。西王母是養陰得道之者也。一與男交而男立損病。（徒だに陽養ふべきのみに非ざるなり。陰も亦た宜しく然るべし。西王母は是れ陰を養ひて道を得るの者なり。一たび男と交はらば而ち男立に損なはれ病む。）（同・養陰第三）^{たちどころ}

西王母は「養陰」の道を得た者であつて、男と交わると男の體がすぐ損なわれて病氣になるといふ。それは男性の精が西王母に取られすぎたからであろう。また『玉房』による「鬼交」の病理説に「與之交通之道、其有勝於人」とあるように、人間と交わるものは性技法に優れると考えられる。例の雌犬、また他の「鬼交」の用例にある、交接によって男の病弱を引き起こした妖怪たちも西王母と同質なのではないだろうか。みな房中の知識に

通曉し、人間の男と交わることによってその精を攝取する者である。このような考え方をしてこそ、雌犬の腹中にある乳色のものが男の精液であると考えられるのである。それを患者に服用させるのは失くした精氣をもとに戻すことに相當し、病弱もそれによって治癒できるとされている。

實は房中術實踐者が自分の精液を服用する事例は確かに存していた。南宋末から元初にかけて活動していた道士李道純は「試金石」⁽²⁸⁾に、當時の道術を上品から下品まで分類し、下品の中にも外道とされる房中術の箇所「食自己精爲還元」ということを記した⁽²⁹⁾。記録の年代が『夷堅志』より遅いが、李道純に批判された以前に、このような術が既に行われていたことが分かる。雌犬の腹中にある「精液」を患者に服用させる事例の背後には、やはり當時の房中術が投影されているのである。

(三) 養陰の道―子供を作るか自用か

さらに次の例と関連させて考えていこう。話を簡略に

紹介する。

寺で雑用を務める一人の行者は寺院にある泥像の婦人と交合し、數か月を経て病氣あんじやになった。住職はそのことを察知して泥像の婦人を粉碎し、その中に數か月の胎兒がいることに氣附いた。それを日干しにして屑にし、薬に混ぜて行者に飲ませると、行者の病氣が治ったという。『夷堅志』甲志卷十七・土偶胎⁽³⁰⁾

男と交わってできた胎兒を男に服用させる治療法は、雌犬の腹中にある精液を男に服用させる方法と同様な道理をしている。「養陰第三」に養陰の道について、

若知養陰之道、使二氣和合、則化爲男子。若不爲子、轉成津液、流入百脈、以陽養陰、百病消除、顔色悅澤、肌好、延年不老。常如少童。(若し陰を養ふの道を知り、二氣をして和合せしめば、則ち化して男の子と爲る。若し子を爲さず、津液と轉成して、百脈に流入せしめ、陽を以て陰を養へば、(則ち)百病消除し、顔色悅澤となり、肌好く、年を延べ不老なり。常に少童の如し。)

〔醫心方〕卷二八・養陰第三

と述べ、養陰術の道を得た女は、男から得た陽氣を自分の陰氣と合わせて男の子を妊娠させることができる一方、もし子どもを作らず、陽氣を自分の體の滋養に轉化させれば、美容や不老のこともできる、としている。

つまり、女性の視角の房中術においては、男性から攝取した精・精氣は、胎兒を作ることにも用いられるし、自分の體や命の養生にも用いられる。「二氣和合」「化爲男子」という記述から、胎兒は男からの精氣（陽氣）と女性自身の精氣（陰氣）とが交わつて轉化したものであると言える。胎兒は男性側の生命力を受けて成形したものである。それを男性に服用させる行爲は、流失した生命力を男性に還補するということを意味している。そのほか、補志卷二二・懶堂女子には、人間の女性に化けて男と交わる妖怪の泥龜を殺して男に食べさせる治療法が見られる⁽³¹⁾。これは、妖怪の泥龜が男から取った精氣を自分の體や命に用いたからである。この治療法は男の精氣をもどし補うことに當たり、黃資深や土偶胎の例と本質

的には全く異なるものであると思われる。

また、「試金石」には外道の房中術を批判する箇所最後に、女に生み出してもらった胎兒を靈藥として服するという事例⁽³²⁾が記録されている。松下道信氏は、それが外丹、内丹及び房中術の思想の絡み合いから生まれた思考であると述べている⁽³³⁾。胎兒を藥とする行爲も當時の道教の房中術と関わっているのだろう。

五 まとめに

氣の醫學論によれば、「鬼交」とは、侵入してきた外部の「鬼」の氣が、内部の氣を壓倒的に押し附けることにより、人間の氣のメカニズムが妨げられて様々な異常が起こってしまう、という病氣である。

しかしながら、魏晉以降の房中家は「陰陽不交」の弊害論を「鬼交」の病理と結び附けて、男女交接の缺失による強い性慾をその病因としている。その解釋が廣く受け入れられ、「交」を性交と理解することが「鬼交」に對する印象の主流となつていった。特に宋の民間では、

「鬼交」の病症は「鬼」との性關係によるものと捉えられることが『夷堅志』から多く確認される。

宋代における「鬼交」の民間治療法に屢々房中術の思想の影響が見られる。本稿では、『夷堅志』にあるいくつかの男性側の「鬼交」の用例を中心に分析を行い、その治療法の背景にある「還精」などの房中思想を明示することができた。

房中書での「還精」は、放出しようとする精・精液を体内に逆流させて生命力の流失を避けることである。『夷堅志』の例においては、放出した精・精液或はそれを吸収したものを男に服用させることにより、既に流失した生命力をもとに戻すことになっている。「還」のルートが異なるが、精液を尊び、それを生命力と同一に見なすことは、房中書での「還精」に通じている。そのほか、これらの治療法が當時実践されていた房中術に関わっていることも確認される。

古代社会における「鬼交」という病氣に対する理解と治療は、房中術の思想と密接に関連していると言える。

房中術との関わりを取り入れることは、これからの「鬼交」の研究において不可缺一環として重要視されるべきである。また、房中術關係の思想・文化が古代中國の疾病觀に如何なる影響を與えていたかも、一つの課題として検討に値すべきである。

註

- (1) 『夷堅志』(中華書局、一九八二) 丁志卷二十一・黃資深。
- (2) 『論衡校釋』(中華書局、一九九〇) 卷二十二・訂鬼篇。一曰、鬼者老物精也。…俗間與物交者、見鬼之來也。…人病見鬼來、象其墓中死人來迎呼之者、宅中之六畜也。及見他鬼非是所素知者、他家若草野之中物爲之也。
- (3) 拙稿「魏晉六朝から初唐に至る病氣知識の變動の一面——「鬼交」と「注」を通して——」(『東洋古典學研究』四十七集、二〇一九)。
- (4) 注(2)前掲引用文章。
- (5) 原田二郎「養生説における「精」の概念の展開」(坂出祥伸編『中國古代養生思想の總合的研究』平河出版社、一九八八)三四五～三四九頁。
- (6) 「神守」とは、精神が内に凝聚する状態である。「腑臟虛」の場合には、五臓に宿るべきである神氣(氣狀の精

神)が衰弱になって五臓の内に凝聚できなくなる。これはすなわち「神守」が弱くなる状態である。

(7) 『管子校注』(中華書局、二〇〇四) 卷十六・内業篇。精也者、氣之精者也。

(8) 『靈樞』では卷六・本藏にある。

(9) 『靈樞』では卷九・癰疽にある。

(10) 小曾戸丈夫・新譯『靈樞』(たにぐち書店、二〇一四)を参考した。

(11) 『諸病源』卷四十・與鬼交通候。如有對忤、獨言笑或時悲泣。

(12) 人之見鬼、目光與臥亂也。：臥而目光反、反而精神見人物之象矣。人病亦氣倦精盡、目雖不臥、光已亂於臥也、故亦見人物象。

(13) 注(5)前掲論文「養生説における「精」の概念の展開」(三五八〜三六五頁)。

(14) 『醫心方』は東京國立博物館所藏半井家寫本の畫像版(e國寶)、及び日本醫學叢書第二卷『醫心方』(土肥慶藏等撰、金港堂出版、一九〇五〜六年)を参照。

(15) 『養生延命録』卷下「御女損益第六」、『正統道藏』第七二册・洞神部方法類。采女問彭祖曰：彭祖曰、不然。男不慾無女、無女則意動、意動則神勞、神勞則損壽：有強郁閉之、難持易失、使人漏精尿濁、以致鬼交之病。：凡男不可無女、女不可無男。若孤獨而思交接者、損人壽

生百病、鬼魅因之共交、失精而一當百。

(16) 坂出祥伸・梅川純代『「氣」の思想から見る道教の房中術』(五曜書房、二〇〇三) 五一頁には「彭祖養生經」とし、土屋英明『道教の房中術―古代中國人の性愛秘法』(文藝春秋、二〇〇三) 十九頁には「彭祖養生經」としてゐる。

(17) 坂出祥伸「彭祖傳説と『彭祖經』」(『道教と養生思想』ペリかん社、一九九二) 八一〜八二頁。

(18) 大形徹「老子と房中術」(『人文學論集』 九・十、一九九二) 七七〜九二頁。

(19) 考察してきた限り、醫書や怪聞記録にかかわらず、「鬼交」の症狀として女性の場合には主に精神的な異常、男性の場合には主に生命力の流失が記されていると言える。例えば「夷堅志」では三十八個の男性の用例の中に、三十個が患者の虚弱に着目している(拙稿「宋の民俗文化」『夷堅志』の「鬼交」を中心に) 東洋古典學研究五十、二〇二〇)。

(20) 黃資深秀才廣昌人、館于鄉里王氏、去主家百步許、有婦人自言主家女來與亂。既久遂病瘵、主人疑焉。子弟於薄暮見牝狗銜酒器人立而扣館門、匿跡窺之。黃啓戸延入、俄聞飲食語笑聲：追擊以杖、殺而曳歸。剖其腹、似有孕、一物如皮毬、膜裏皆精液、疑結如乳。即煮熟之加鹽醢、託爲野物以啗黃、婦人遂不至。黃他日始知其詳、大驚愧、

然所患療疾亦愈。

(21) 注(一)前掲拙稿。

(22) 平江土人徐賡習業僧寺、見室中殯宮有婦人畫像垂其上、悅之。纔反室、即夢婦人來與合。自是夜以爲常、未幾遂死。家人有嘗聞其事者至寺中蹤跡得之。其像以竹爲軸、剖之、精滿其中。

(23) 大形徹『馬王堆出土文獻譯注叢書 胎產書・雜禁方・天下至道談・合陰陽方・十問』(東方書店、二〇一五) 三二一頁。

(24) 房中之法十餘家：其大要在於還精補腦之一事耳。

(25) 注(一)前掲論文「養生説における「精」の概念の展開」(三五八―三六一頁)。

(26) 嚴善昭「還精補腦術の形成と展開」(『東方宗教』一〇三號、二〇〇四)。ただ、嚴善昭氏は「還精」を「還精補腦」と同じにしているようである。

(27) 『黃庭内景玉經註』卷中「瓊室章第二十一」、『正統道藏』第一九〇冊・洞玄部玉訣類。

(28) 『中和集』卷二「試金石」、『正統道藏』第一一八冊・洞真部方法類。

(29) 中國における房中關係の早期の記載には精液を飲む方法がなかった。後秦に漢譯された佛典『十誦律』(T1435) には、比丘尼が密かに比丘の精液を飲んだという話が記されているが、その行爲が修行に關わるかど

うかは言及されていない。11世紀初頭にチベット語譯にされた密教經典(例えば松長有慶譯『秘密集會タントラ和譯』法藏館、二〇〇〇)に性的ヨーガの教えが見られる。その修行で排泄した精液が貴いものとして供養され、修行者にも飲まれるという。この性的ヨーガを含める密教の法門がチベットから西夏に傳來したことがあるとされる。宋の道教修行者たちは西夏に傳來した性的ヨーガの法門に出會い、それを房中の「還精」思想と結び付けて房中術の實踐に應用した可能性があると見えよう。これについては今後の研究で論じたい。

(30) …一行者姓黃主給香火、顧土偶中乳婢乳垂于外、悅之、每至必摩拊咨惜。一旦、偶人目動、遂起行、携手入屏後狎昵。自是日以爲常。累月矣、積以卧病、猶自力登山不已。主僧陰伺之、至半山即有婦人迎笑。明日尾其後、婦人復至。以拄杖擊之、鏗然仆地。於碎土中得一兒胎、如數月孕者。令行者取歸、暴爲屑、和藥以食、遂愈。

(31) …以斧破鼈、剖骨并肉暴日中…命病者晨夕餌之…至藥、采而服之。

(33) 松下道信『宋金元道教内丹思想研究』(汲古書院、二〇一九)三一九―三三二頁「内丹とカニバリズム―食人・嬰兒・房中術―」。